アイロニーの理解における言及の影響¹

——言及理論の妥当性の検討——

筑波大学² 西谷健次³

The effects of speaker's mention on understanding of ironies

Kenji Nishitani (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305)

Sperber and Wilson's (1981) Mention Theory gives an explanation of how to be understood an ironical utterance. Ironies are mentions of meaning conveying a derogatory attitude to the meaning mentioned (Sperber, 1984). The validity of this theory was evaluated in three experiments. All experiments required subjects to rate a sarcastic degree of an utterance. The results of Experiments 1 and 2 showed that the meaning of an utterance was interpreted as sarcastic when the utterance was positive, independent of speaker's mention. In Experiment 3, which examined the effect of the marker of mention, "You said...", the utterance mentioned was interpreted as sarcastic. These results suggested that Mention Theory only partially give correct prediction of understanding of ironies. The addressee's inferences concerning speaker's intention was discussed.

Key words: ironies, Mention Theory, sarcastic implications, speaker's intentions.

日常言語では、字義的に表現される以上の意味が伝達される。こうした非字義の意味がどのように理解されるのかを明確にしていくことは、我々の言語処理のメカニズムを検討していく上で重要であろう。ところで、相手に対する非難や軽蔑を、事実と反する表現を用いることによって伝達する言語表現にアイロニー (irony)⁴ がある。アイロニーは、表現と意味の相違が明らかな言語表現の一つであることから、非字義の意味の理解を検討する上で格好の材料だと考えられる。

本研究は、Sperber ら (Sperber & Wilson, 1981; Sperber, 1984) がアイロニーの理解に関して提唱した言及理論 (Mention Theory) の妥当性の検討を通して、我々がアイロニーをどのようにして理解している

のかを検討していく。なお、本研究での用語の使用にあたり、発話そのものとその際に生じる意味を区別する。“アイロニー的発話 (ironical utterance)” は一見したところ事実と反する表現とし⁵、その際に生じる聞き手に対する非難や軽蔑などをその発話の“意味 (implication)” とする。アイロニーの発話によって非難や軽蔑などの意味が聞き手に感じられる場合に、その発話がアイロニーとして理解されたものとする。

言及理論の基本的な主張によれば、アイロニーとは“意味 (meaning)”⁶ に対して間接的な繰返しによる言及 (echoic mention)⁷ を行うことであり、これによりその意味に対して軽蔑的な態度 (derogatory atti-

¹ 本研究の一部は、1993 年日本教育心理学会第 35 回総会および 1994 年日本心理学会第 57 回大会で発表した。

² 現所属：作新学院大学経営学部。

³ 本論文を作成するにあたり、御指導頂きました筑波大学福沢周亮教授に深く感謝致します。

⁴ “irony” は“皮肉”と訳出するのが一般的であるが、本研究では、あえて“アイロニー”とした。これは、本研究での“アイロニー”の定義が“皮肉”に含まれる事例を包括していないことによる、概念的な混乱を避けるためである。例えば、“念入りにマスカラまでつけて、みんながわき目も振らずに仕事してるっていうのにねえ” (筒井, 1993) は、単に行為を叙述した表現である。これは、相手に対する非難を表現した“皮肉”ではあるが、定義により“アイロニー”とは言えない。

⁵ “アイロニー的発話”の定義を“一見したところ”としたのは、この言及理論の主張に立脚してのものである。

⁶ アイロニーの発話に先立って発せられた発話や聞き手の期待を指す。

⁷ “言及”の概念は、Sperber & Wilson (1986) や Wilson & Sperber (1992) では“解釈 (interpretation)”の概念に変更されている。これは、研究の対象となる言語表現の範囲を拡大するための手段である。なお、実質的な説明には変更は加えられていない。本研究で“解釈”ではなく“言及”という概念を用いたのは、実験で使用した材料が“言及”の概念でカバーできる範囲のものであること、“解釈”という一般的な概念を用いることで議論が不明瞭になるのを避けること、1986 年以降の心理学的研究でも“言及”の概念を使用しており、そうした研究との対応をもたせることが理由である。

tude)を伝達するもの”(Sperber, 1984, p. 131)である。例えば、以下では、アイロニーの話し手(以下、話し手)であるBは、アイロニーの聞き手(以下、聞き手)であるAの“天賦の才”を繰り返している。AがBのアイロニーを理解するのは、こうしたBの繰返しによる言及に気付いて、Bの軽蔑的な態度を理解するからである。

A: 私は今まで天賦の才だけ頼ってきたことが誤りだと初めて気付きました

B: ほう、天賦の才ねえ

(橋元, 1989)

言及理論では、Bの発話は、意味的には“‘天賦の才’などと馬鹿げたことを言うんじゃない”という発話とほぼ同義であり(Blakemore, 1992)、表現的には、引用以外の部分が省略された発話だとされる。アイロニーの説明で“間接的”としているのは、アイロニーが基本的には、このような省略を含むものであることを指してのことである。このように言及理論では、アイロニーは、一般に考えられているような事実と反する表現ではなく、あくまでも言及であることが仮定されている。

これまでの研究では、言及理論を支持する結果が報告されている(Gibbs, 1986; Kreuz & Glucksberg, 1989; Jorgensen, Miller, & Sperber, 1984)。例えば、Jorgensen et al. (1984)は、ストーリー中で提示されたアイロニー的発話がどのような意味であるのかを被験者に自由に記述させた。実験条件の操作はストーリー中で行われており、特定の人物の発話に対して繰返しによる言及を行うかどうか操作された。その結果、言及を行った発話の方が、そうでない発話よりも、アイロニーとして理解されやすいことが示された。Kreuz & Glucksberg (1989)は評定法により検討しており、Gibbs (1986)は読み時間による検討を行っている。どちらも同様に言及理論を支持する結果を得ている。

ところで、アイロニーが発話される場合、肯定表現によるアイロニーは多いが、反対に否定表現によるアイロニーは少ない(Clark & Gerrig, 1984; Kreuz & Glucksberg, 1989)。アイロニーにこのような非対称性(asymmetry)が生じることは、言及理論では次のように説明されている。聞き手が、話し手と聞き手のどちらもが知っている期待や規範に反する行動をとったとする。その場合、話し手がももとの期待に対して繰返しによる言及を行うことにより、話し手は、聞き手にその期待を思い起こさせ、期待と行動のずれに注意を向けさせる。これにより聞き手は、話し手の軽蔑的態度を理解するのである(Kreuz & Glucksberg, 1989)。ここで話し手や聞き手が一般にもつであろうと想定される期待や規範は、おそらくは社会的に望ましいと考えられるような肯定的な内容である。アイロ

ニーとは、期待に対する言及であることから、話し手と聞き手に肯定的な期待が共有されている状況が多いのであれば、結果的に、肯定表現によるアイロニーが多くなるのである⁸。

では、否定表現がアイロニーとして理解されることはないのだろうか。この点に関して、Kreuz & Glucksberg (1989)は、言及理論の観点から次のように予測している。“You’re a terrible friend!”という否定表現は、…アイロニーとして用いることができる。例えば、ある友人が、自分自身をまったくもって信頼のおけない卑劣な人物であると以前は言っていたのに、その後、勇敢にも強盗を未遂に終わらせた。その場合、この肯定的な事実に関する否定表現はアイロニーとして用いることができるであろう。その発話によって、以前に予測したことが友人に思い起こされて、予測と実際に生じたこととの間のずれに注意が向けられるからである”(p. 376)⁹。Kreuz & Glucksberg (1989)の予測は、否定表現によるアイロニー的発話であっても、聞き手が否定的な期待をもっている場合には、アイロニーとして理解されることを示唆するものである。

西谷(1993a)は、この予測を明らかにすることを目的とした実験を行っている。実験は、ストーリー中でアイロニー的発話を提示し、その発話の嫌味の程度を評定法により検討するものであった。実験条件はストーリー中で操作され、聞き手の期待が肯定的であるか否定的であるか、話し手が聞き手の期待に言及するかどうか操作された。話し手が聞き手の肯定的な期待に言及している発話(肯定表現)と否定的な期待に言及している発話(否定表現)を比較してみると、肯定的な期待に言及している発話(肯定表現)の方が嫌味の程度が高いことが示された。これは、否定的な期待に対する言及(否定表現)であってもアイロニーとして理解されるという言及理論の予測に反するものである。

西谷(1993a)の実験では、言及理論の予測に反する結果が示されたが、この結果から即座に言及理論が誤りであると結論を下すことはできないと思われる。

⁸ 以下の議論の明確化のため“肯定”と“否定”という用語の使用に関する説明を補足しておく。聞き手のもつ期待に対しては“肯定(的)”“否定(的)”という用語を使用する。前者は一般的に考えて望ましい内容、後者は望ましくない内容であることを示す。アイロニー的発話に関しては“肯定表現”“否定表現”という用語を使用する。これは話し手による発話表現にのみ関係するものであり、前者は“勉強する”、後者は“遊ぶ”に対応する。また、非難や軽蔑など聞き手の価値を上下する場合には“肯定”や“否定”という用語は使用しない。

⁹ 彼らは“繰返しによる想起理論(Echoic Reminder Theory)”を提唱している。言及の影響が、聞き手の期待と実際の行為がずれていることに注意を向けさせることにあることを強調したものである。基本的な内容は、言及理論と同様である。

というのも、西谷（1993a）の実験では、材料分析を十分に行っていないために、要因の統制が適当であったかどうか判断できないからである。要因の統制に関して特に問題だと思われるのは、一つには、聞き手の期待が否定的な場合、その期待がだれもが否定的であると判断するような内容であったかどうかということであり、もう一つには、聞き手の期待の強さが、肯定的である場合と否定的である場合で同程度であったかどうかということである。本研究では、材料のこれらの特性についてあらかじめ統制を行った上で、聞き手が否定的な期待をもっている場合に、その期待に言及した発話（否定表現）がアイロニーとして理解されるかどうかを検討する。言及理論の予測によれば、話し手が聞き手の期待に言及することによって、発話がアイロニーとして理解される。また、こうした言及の影響は、聞き手の期待の内容が否定的な場合であっても、肯定的な場合と同様に認められると予測される。

実験 1

期待内容が肯定と否定に分けられ、しかもそれぞれの期待の強さが同程度である材料を用いて、言及理論の妥当性を検討する。言及理論によれば、聞き手のもつ期待が肯定的であろうと否定的であろうと、話し手がその期待に言及することによって、発話がアイロニーとして理解されると予想される。

方法

被験者 大学生 65 名。条件ごとの人数は、肯定的期待言及あり条件（PM 条件）13 名、肯定的期待言及なし条件（PN 条件）14 名、否定的期待言及あり条件（NM 条件）23 名、否定的期待言及なし条件（NN 条件）15 名であった。

材料 材料の作成にあたり予備調査を行った。学生生活に関連していると思われる肯定的期待文と否定的期待文とそうした期待を抱いた理由を述べた文を 12 対作成し、大学生 25 名に期待度評定（期待の強さほどの程度か）、肯否評定（期待内容は肯定的か否定的か）、同意性評定（同様の考えか）、納得性評定（期待をもつ理由は納得のいくものか）を 5 段階で評定させた。その結果、期待内容が肯定と否定に分かれ、しかもどちらの期待内容であっても十分に強く期待されていると判断されたのは、“新たな知識を得たいから勉強したい”と“高校までにいやというほどやってきたから勉強したくない”の対だけであった。これらの期待内容に基づいて、4 種類のストーリーを作成した（付録参照）。

それぞれのストーリーは、聞き手の期待が肯定的内容か否定的内容か、話し手による発話が聞き手の期待に言及しているかどうか異なっていた。聞き手の期

待が肯定的であり、話し手が言及を行う条件が PM 条件、言及を行わない条件が PN 条件である。同様に、聞き手の期待が否定的であり、話し手が言及を行う条件が NM 条件、言及を行わない条件が NN 条件である。登場人物は A と B の 2 名であり、A はアイロニーの話し手、B は聞き手であった。ストーリーはすべて同じ構成であった。最初に聞き手の期待が記され、続いてその期待に関連する事実、最後に話し手によるアイロニー的発話が記述された。なお、評定の対象となるアイロニー的発話には下線が引かれた。

評定項目 言及理論の妥当性を検討する上で、最も中心的なものは嫌味性評定（話し手が嫌味を言っているかどうか）¹⁰ であるが、これ以外に、意図性評定（話し手の発話の意図が明瞭かどうか）、自然性評定（発言として自然かどうか）、冗談性評定（話し手が冗談を言っているかどうか）を加え、全体として 4 種類の評定項目を用いた。

意図性評定と自然性評定は、Grice（1975, 1978）に基づいて加えられた。もし、言及理論が誤りであり、アイロニーが言及ではないのであれば、アイロニーは反事実を表すものである。その場合、発話は会話の原則を見かけの上では無視（flouting）していることになる（Grice, 1975）。原則の無視は、発話そのものの自然さを損なうものと考えられることから、自然性評定の結果に影響が認められることが考えられる。また、Grice（1978）は、発話の理解において聞き手による話し手の意図の推測の必要性を指摘している。おそらくはアイロニーの理解においても、意図の推測が必要であると予想される。また、冗談性評定は、西谷（1993b）に基づいて加えられた。彼によれば、アイロニー的発話には、嫌味などの否定的な意味の側面と冗談などの楽観的な意味の側面がある。冗談性評定は、この点を考慮して加えられた。

言及理論によって直接的に予想されるのは、嫌味性評定に関する結果だけであり、言及によって発話が嫌味になることである。しかし、Grice（1975, 1978）と考え合わせるならば、話し手が言及を行う場合には、発話が自然であり、意図も明瞭であると判断されることが予想される。

手続き 被験者には、4 種類のストーリーのうち 1 種類が配布された。被験者は、登場人物が被験者と同性の同級生であると仮定した上で、アイロニー的発話に関する 4 種類の評定と自由記述を行った。被験者は、各評定項目に対して、“全くそう思わない”から“全くそのとおりだと思う”の 7 段階で評定すること

¹⁰ この実験と同様の実験を実施した後に、大学生 73 名に皮肉と嫌味の定義を記述させたところ、嫌味の方が否定的感情の伝達または表出の程度が高いことが示された。この結果より、アイロニー的発話の意味を問う上で、皮肉よりも嫌味の方が、否定的意味を強く反映し得るものと考えられる。

が求められた。自由記述では、なぜ話し手がそのように発話したと思ったのかを自由に記述するように求められた。実験は被験者ペースで行われた。

結果と考察

以下の分析は、“全くそう思わない”を1点、“全くそのとおりだと思う”を7点として計算を行った。各評定項目の条件別の平均値を Figure 1 に示した。

評定項目ごとに、被験者間計画による2（聞き手の期待要因：肯定的、否定的）×2（話し手による言及要因：あり、なし）の分散分析を行った。その結果、意図性、自然性、嫌味性の各評定項目で、期待要因と言及要因の交互作用が有意であり（ $F(1, 61)=33.03, p<.01$; $F(1, 61)=8.62, p<.01$; $F(1, 61)=27.25, p<.01$ ）、冗談性では言及要因の主効果が有意であった（ $F(1, 60)=11.83, p<.01$ ）。交互作用の認められた三つの評定項目に関して単純主効果検定を行ったところ、意図性と嫌味性では、すべての水準で要因の効果が認められた（言及あり水準の期待の効果： $F(1, 61)=18.33, p<.01$; $F(1, 61)=17.11, p<.01$ ；言及なし水準の期待の効果： $F(1, 61)=14.80, p<.01$; $F(1, 61)=10.53, p<.01$ ；肯定的期待水準の言及の効果： $F(1, 61)=27.94, p<.01$; $F(1, 61)=12.44, p<.01$ ；否定的期待水準の言及の効果： $F(1, 61)=8.08, p<.01$; $F(1, 61)=14.87, p<.01$ ）。また、自然性では、言及なし水準の期待の効果（ $F(1, 61)=9.42, p<.01$ ）、および否定的期待水準の言及の効果が認められた（ $F(1, 61)=7.53, p<.01$ ）。

次に、嫌味性評定に関して、条件ごとに評定尺度の中央値にあたる4点との比較を t 検定により行った。その結果、PM条件とNN条件は、嫌味の程度が4点よりも有意に高く（ $t(13)=1.36, p<.01$; $t(14)=1.20, p<.01$ ）、NM条件は4点よりも有意に低かった（ $t(12)=0.96, p<.01$ ）。この結果は、聞き手が肯定的な期待をもっている場合には、話し手が聞き手の期待に言及することによって嫌味になるが、否定的な期待をもっている場合には、言及しないことによって嫌味

になることを示すものである。

言及理論によれば、聞き手の期待内容にかかわらず、話し手が聞き手の期待に言及することによって、その発話がアイロニーとして理解されることが予想された。しかし、言及の効果が認められたのは、唯一、冗談性評定だけであった。全体として見ると、話し手による言及は、話し手のもつ期待の内容の相違によって、全く正反対の効果をもつと言える。すなわち、聞き手が肯定的な期待をもっている場合には、話し手が聞き手の期待に言及することによって、その発話はアイロニーとして理解され、聞き手が否定的な期待をもっている場合には、話し手が聞き手の期待に言及しない方がアイロニーとして理解される。

以上の結果は、言及理論の予測とは明らかに異なるものだと言えるが、この結果から言及理論が誤りであると結論を下すのは早計であろう。というのも、被験者が聞き手の否定的期待を納得できなかったために、言及理論の予測と異なる結果が生じたことが考えられるからである。予備調査では、納得性評定を行ったが、否定的期待文に対する評定平均値は、2.60と低い値であった。これは、聞き手の否定的期待に対して納得できなかった被験者が多かったことを示すものである。この影響が反映してしまい、予想に反する結果が生じてしまったのではないかと考えられる。この点を検討するために実験2を行った。

実験 2

実験2では、聞き手のもつ期待に関する評定（納得性評定）とアイロニー的発話に関する評定を同一の被験者に行わせる。そして、納得性評定で高い評定を行う被験者に注目して分析を行う。

方法

被験者 大学生174名。条件ごとの人数はPM条件46名、PN条件44名、NM条件41名、NN条件43名であった。

材料と評定項目 実験1と同じ4種類のストーリーを使用した。納得性評定と話し手のアイロニー的発話の評定を分けて行うために、ストーリーは2ページに分けられた。最初のページには、聞き手の期待の内容が記され、次のページには、期待に関連する事実とアイロニー的発話が記された。アイロニー的発話に関する評定項目は、実験1と同様であった。納得性評定は、予備調査と同様の問いであったが、7段階であるところが異なった。

手続き 被験者は、1ページ目で聞き手の期待内容に関する評定を行い、2ページ目でアイロニー的発話に関する評定を行った。自由記述課題は行わなかった。それ以外の手続きは、すべて実験1と同様であった。

Figure 1. 実験1の各評定項目の平均値。

結果と考察

分析は、納得性評定に対して7段階中5段階以上に評定した被験者のみを対象とした。その結果、被験者数は、PM条件が38名、PN条件が40名、NM条件が13名、NN条件が16名となり、全体としては107名となった。以下の分析は、評定尺度の各水準に対して1点から7点をあてはめて計算を行った。アイロニー的発話に関する各評定項目の条件別の平均値をFigure 2に示した。

評定項目ごとに、被験者間計画による2（聞き手の期待要因：肯定的、否定的）×2（話し手による言及要因：あり、なし）の分散分析を行った。その結果、意図性と嫌味性の項目で、期待要因と言及要因の交互作用が有意であった（ $F(1, 102) = 20.45, p < .01$; $F(1, 103) = 34.63, p < .01$ ）。単純主効果検定の結果、どちらの評定項目もすべての水準で要因の効果が認められた（言及あり水準の期待の効果： $F(1, 102) = 9.02, p < .01$; $F(1, 103) = 21.17, p < .01$ ；言及なし水準の期待の効果： $F(1, 102) = 11.51, p < .01$; $F(1, 103) = 13.85, p < .01$ ；肯定的期待水準の言及の効果： $F(1, 102) = 11.80, p < .01$; $F(1, 103) = 16.08, p < .01$ ；否定的期待水準の言及の効果： $F(1, 102) = 8.77, p < .01$; $F(1, 103) = 18.59, p < .01$ ）。また、自然性では、両要因間の交互作用に有意な傾向が認められたが（ $F(1, 103) = 3.54, .05 < p < .10$ ）、単純主効果検定の結果に有意差はなかった。冗談性には有意差は見られなかった。

次に、嫌味性評定に関して、条件ごとに評定尺度の中央値にあたる4点との比較を t 検定により行った。その結果、PM条件とNN条件が、嫌味の程度が4点よりも有意に高いことが示された（ $t(37) = 2.03, p < .01$; $t(15) = 1.88, p < .01$ ）。この結果は、聞き手が肯定的な期待をもっている場合には、話し手が聞き手の期待に言及することによって嫌味になるが、否定的な期待をもっている場合には、言及しないことによって嫌味になることを示すものである。

Figure 2. 実験2の各評定項目の平均値。

以上の結果は、実験1と同様であり、否定的期待の場合には、言及理論の予測とは明らかに異なるものである。また、被験者が聞き手の否定的期待を納得できないために理論に反する結果が導かれたという可能性がないことが示唆される。

この結果は、言及理論の予想とは異なるものではあるが、理論的な誤りを示すものではないと思われる。というのも、アイロニーが理解されるには、聞き手が話し手の言及に気付くことが必要であるが、言及になるように操作したはずのNM条件で、聞き手が言及に気付かなかったことが考えられるからである。条件の操作は、いわば話し手の立場からのものであり、被験者の課題は聞き手の立場からのものである。こうした立場の相違により、聞き手の立場からは、言及に気付かないという可能性は十分に考えられるところである。そこで実験3では、話し手が聞き手の期待に言及していることが明瞭になるように、直接的な言及を行う発話を用いて実験を行うこととする。

実験 3

否定的期待に対する言及がアイロニーとして理解されないのは、話し手が聞き手の期待に言及していることに、聞き手が気付かないことが原因であることが推察された。実験3では、話し手が聞き手の期待に言及していることを明示する標識を加えることの影響を検討する。なお、こうした言及標識を加えることによって、発話は字義的表現になり、本研究におけるアイロニー的発話の定義からは外れることとなる。しかし、言及標識の有無にかかわらず同様の意味が生じるという言及理論の仮定に基づくならば（Blakemore, 1992）、直接的な言及であっても、言及の影響が認められる場合には、言及理論の妥当性についての検討を加えることができると考えられる。この意味で、言及標識の影響を検討することは有益であると思われる。言及標識により言及の影響がより明確になることから、実験1で予想した結果（嫌味性、意図性、自然性のそれぞれの評定項目で条件差が生じないこと）が生じるものと考えられる。

方 法

被験者 大学生25名。条件ごとの人数は、PM条件13名、NM条件12名であった。

材料と評定項目 実験1, 2で使用した材料のうち、話し手が聞き手の期待に言及するストーリー2種類を使用した。実験1, 2で使用した材料との相違は、唯一、発話文だけであった。発話文は引用＋言及標識の形であり、肯定表現は“‘大学では勉強するんだ’と言ってたね”であり、否定表現は“‘大学では遊ぶんだ’と言ってたね”であった。小冊子の構成と評定項目は、実験1と同様であった。

手続き 被験者には、2種類のストーリーのうち1種類が配布された。それ以外の手続きは、実験1と同様であった。

結果と考察

評定項目に関する以下の分析は、尺度の各水準に1点から7点をあてはめて計算を行った。各評定項目の平均値を Figure 3 に示した。

最初に、嫌味性評定の分析を行った。評定尺度の中央値にあたる4点との比較を t 検定により行ったところ、PM 条件と NM 条件のどちらも、嫌味の程度が4点よりも有意に高いことが示された ($t(12)=2.15$, $p<.01$; $t(11)=1.00$, $p<.05$)。この結果は、聞き手の期待内容にかかわりなく、話し手が聞き手の期待に言及することによって、発話が嫌味になることを示すものであり、言及理論の予測に一致するものである。もちろんこの結果は、言及標識のある発話を用いてのものである。言及標識のある発話は、上述のように字義的な発話であることから、この結果から、アイロニーそのものの理解に対して直接的な考察を加えられるわけではない。しかし、おそらくは、仮に言及標識がなくとも、話し手による言及であることが聞き手に明らかな発話は、それが否定表現であってもアイロニーとして理解されるものと推察される。

次に、評定項目ごとに、1要因2水準の被験者間計画による分析を行った。要因は、聞き手の期待であり、肯定的と否定的の2水準であった。その結果、意図性と嫌味性の評定項目で5%水準で有意差が認められた ($F(1, 23)=5.73$, $p<.05$; $F(1, 23)=5.67$, $p<.05$)。どちらの評定も肯定的期待の方が程度が高かった (Figure 3)。この結果は、アイロニーの理解を言及だけで説明することができないことを示すものであり、言及理論の限界を示すものである。

以上の結果は、アイロニーの理解において、言及が影響を及ぼす可能性のあること、それ以外にも影響を及ぼす要因が存在することを示唆するものである。ところで、実験1, 2では、PM 条件と NN 条件がアイ

ロニーとして理解されることが示された。NN 条件の結果が言及以外の要因の影響であることは明らかであるが、PM 条件の結果はどうであろうか。言及以外の要因の影響とは考えられないだろうか。実験2で考察したように、言及を行う条件であっても、そうした条件の操作は話し手の立場からのものであり、聞き手が言及に気付いていないこともあり得るからである。そこで、この点を明らかにするために、実験3と実験1, 2の自然性評定の結果を比較する。

言及理論では、アイロニーが反事実的表現ではないことが仮定されている。しかし、聞き手が言及であることに気付かないのであれば、聞き手は発話を反事実を表すものと解釈するはずである。もしそうであれば、その発話は会話の原則の見かけ上の無視を含んでおり、聞き手はその発話から不自然な印象を受けると考えられる。従って、PM 条件では、実験1, 2の自然性評定値と実験3の値が同程度になることが予想される。

実験1, 2と実験3のPM 条件を t 検定により比較したところ、実験1, 2の結果は、実験3よりも有意に低いことが示された ($t(25)=6.90$, $p<.01$; $t(49)=3.08$, $p<.01$)。この結果は、聞き手が、実験1, 2のPM 条件の発話を言及とみなしていないことを示すものと考えられる。従って、実験1, 2のPM 条件がアイロニーとして理解されたのは、聞き手が言及に気付いたからではなく、言及以外の要因が影響しているのだと推察される。

全体的考察

以上の結果より、アイロニーの理解に言及の効果が生じ得ること、および言及以外の効果が存在することが示唆された。前者の効果を予測している点で、言及理論は妥当であると言えるが、後者の効果を予測できない点で限界があると言えよう。以下では、言及の効果とはどのようなものか、言及以外の効果とは何かに関して検討していく。

最初に、言及の効果を自由記述課題の結果に基づいて考察する。実験3の結果より、話し手の言及に聞き手が気付けばアイロニーが理解される可能性のあることが示された。これまでの考察から、実験1のNM 条件では、聞き手は話し手の言及に気付かず、実験3では言及に気付いているものと考えられる。NM 条件において、聞き手のもともとの期待と行動が一致していないことに注目している被験者の数を比較すると、実験1では23名中1名であったのに対して、実験3では12名中7名であった。これは、直接的な言及が聞き手に期待と事実のずれを意識させる効果があることを示すものである。また、アイロニー的な発話が嫌味になるのは、聞き手にこうしたずれを意識させることによってであると考えられる (Kreuz

Figure 3. 実験3の各評定項目の平均値。

& Glucksberg, 1989; 河上, 1984).

では、言及以外の効果とは何であろうか。この点に関して、実験で使った評定項目間の相関係数に注目すると、意図性と自然性、意図性と嫌味性、自然性と嫌味性のそれぞれの項目間に正の相関があり、冗談性はどの項目ともほぼ無相関であった。ここで、嫌味性を目的変数、意図性と自然性を予測変数として重相関係数を計算したところ $R=.277$ であり、有意であった ($F(2, 260)=10.80, p<.01$)。嫌味性と意図性の偏相関係数は.274 であり ($F(1, 260)=21.10, p<.01$)、嫌味性と自然性の偏相関係数は-.02 であった ($F(1, 260)=0.00, ns$)。この結果は、アイロニーの理解における言及以外の効果として、話し手の意図が関係していることを示唆するものである。

発話を理解する際に、意図の推測が重要であることは、従来の研究でも指摘されてきたところである (Gibbs & Gerrig, 1989; Gibbs, Kushner, & Mills, 1991; Happé, 1993; Winner & Leekam, 1991)。では、アイロニーの理解における話し手の意図の推測とはどのようなものであろうか。実験 1, 2 の結果に再度注目してみる。実験 1, 2 とも PM 条件、NN 条件の発話が嫌味の程度が高かった。どちらの条件とも、遊んでいる聞き手に対する“勉強している”という発話であったことがわかる。自由記述の結果では、どちらの条件とも、遊んでいる聞き手に注意を促す、非難するなどの記述が見られた。このことより、話し手が自身の基準に従って聞き手の行動を否定的に評価し、話し手はそれを聞き手に伝達することを意図しており、聞き手は、話し手のそうした意図を、発話と自身の行動の対比に基づいて推測するものと考えられる。

結 論

本研究の目的は、言及理論がアイロニー理解の理論として妥当であるかどうかの検討を通して、アイロニーがどのように理解されるのかを検討することであった。三つの実験の結果からは、アイロニーの理解に言及が影響し得ること (実験 3)、および意図の推測が関係していること (実験 1, 2, 3) が示された。前者の効果の予測していることに注目すれば、言及理論はアイロニー理解に関する理論として妥当だと考えられるが、後者の効果の存在を考えれば、その予測には限界があると言えよう。

言及の効果とは、聞き手のもともとの期待と実際の行動のずれを意識させることであり、また、意図の効果とは、聞き手の行動に対する話し手の評価を聞き手が推測することである。どちらによっても、聞き手はアイロニーの発話の否定的な意味を理解することができる。

とはいえ、これだけではアイロニーの理解を説明するには不十分であろう。嫌味性を目的変数、意図性と

自然性を予測変数としたとした重相関係数の説明率は、わずかに 7.7% にすぎない。おそらく、説明率がこのように低くなるのは、聞き手がどのように話し手の意図を推測するのかについての変数が欠如しているからであろう。意図の推測には、言語的・非言語的情報、あるいは話し手と聞き手の関係や発話の状況などが影響していると推察される。例えば、Haiman (1990) によれば、アイロニーには特殊な音調や強勢が生じる。河上 (1984) は、必要以上に丁寧な発話がアイロニカルになる例を報告している。筒井 (1993) は、アイロニーにさまざまな表現のバリエーションがあり得ることを示している。これらの点を今後より詳細に検討する必要があるだろう。

これら以外にも、アイロニーの理解には、さまざまな問題が残されている。本研究では、冗談性に関して十分に吟味することができなかったが、アイロニーは単に嫌味であるだけでなく、ユーモアとも関連するものである (Nash, 1985)。また、発話の向けられる相手が不明瞭であるのに、アイロニーになる場合もある。例えば、ひどい雨の日に“今日はいい天気だ”という発話は、仮に独り言として言ったものであっても、反事実であることからアイロニーに分類される。こうしたアイロニーは、なぜ発話され、どのようにして理解されるであろうか。これらの問題を解決していくことも、今後の研究においては必要であろう。

引用文献

- Blakemore, D. 1992 *Understanding utterances: An introduction to pragmatics*. Oxford: Basil Blackwell.
- Clark, H., & Gerrig, R. 1984 On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, **113**, 121-126.
- Gibbs, R. 1986 On the psycholinguistics of sarcasm. *Journal of Experimental Psychology: General*, **115**, 3-15.
- Gibbs, R., Kushner, J., & Mills, W. 1991 Authorial intentions and metaphor comprehension. *Journal of Psycholinguistic Research*, **20**, 11-30.
- Gibbs, R., & Gerrig, R. 1989 How context makes metaphor comprehension seem “special”. *Metaphor and Symbolic Activity*, **4**, 145-158.
- Grice, H. P. 1975 Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics*. Vol. 3. *Speech Act*. New York: Academic Press. Pp. 113-127.
- Grice, H. P. 1978 Further notes on logic and conversation. In P. Cole (Ed.), *Syntax and semantics*. Vol. 9. *Pragmatics*. New York: Academic Press. Pp. 113-127.
- Haiman, J. 1990 Sarcasm as theater. *Cognitive Linguistics*, **1**, 181-205.
- Happé, F. 1993 Communicative competence and

- theory of mind in autism: A test of relevance theory. *Cognition*, **48**, 101-119.
- 橋元良明 1989 背理のコミュニケーション 劉草書房
- Jorgensen, J., Miller, G., & Sperber, D. 1984 Test of the mention theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, **113**, 112-120.
- 河上誓作 1984 文の意味に関する基礎的研究 大阪大学文学部紀要, **24**, 171-278.
- Kreuz, R., & Glucksberg, S. 1989 How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, **118**, 374-386.
- Nash, W. 1985 *The language of humor: Style and technique in comic discourse*. New York: Longman.
- 西谷健次 1993a 聴者の期待がアイロニーの非対称性に及ぼす影響 読書科学, **37**, 53-60.
- 西谷健次 1993b アイロニーの状況特性と含意 計量国語学, **19**, 117-132.
- Sperber, D. 1984 Verbal irony: Pretense or echoic mention? *Journal of Experimental Psychology: General*, **113**, 130-136.
- Sperber, D., & Wilson, D. 1981 Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (Ed.), *Radical pragmatics*. New York: Academic Press. Pp. 296-318.
- Sperber, D., & Wilson, D. 1986 *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell.
- 筒井佐代 1993 皮肉—話し手の観点から— 愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編), **25**, 333-349.
- Wilson, D., & Sperber, D. 1992 On verbal irony. *Lingua*, **87**, 53-76.
- Winner, E., & Leekam, S. 1991 Distinguishing irony from deception. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 257-270.

—1994. 9. 6 受稿, 1995. 9. 9 受理—

付 録

実験 1, 2 で使用した材料

〈PM 条件〉

高校時代, Bさんは, 新しい知識を得たいので, 大学ではぜひとも勉強したいと思っていると, 同級生の Aさんに話していた. いざ大学に入学してみると, 以前には知らなかった遊びがあり, 勉強などせずに遊び回っていた. そんな様子を見て, Aさんは“最近, 勉強はかどっているみたいだね”と言った.

〈PN 条件〉

高校時代, Bさんは, 新しい知識を得たいので, 大学ではぜひとも勉強したいと思っていると, 同級生の Aさんに話していた. いざ大学に入学してみると, 授業内容は高度で, 必死に勉強しなければついていけなかった. そんな様子を見て, Aさんは“最近, 遊んでいるみたいだね”と言った.

〈NM 条件〉

高校時代, Bさんは, 大学に入学するまでにいやというほど勉強をしてきたので, 大学ではもう勉強などしたくないと思っていると, 同級生の Aさんに話していた. いざ大学に入学してみると, 授業内容は高度で, 必死に勉強しなければついていけなかった. そんな様子を見て, Aさんは“最近, 遊んでいるみたいだね”と言った.

〈NN 条件〉

高校時代, Bさんは, 大学に入学するまでにいやというほど勉強をしてきたので, 大学ではもう勉強などしたくないと思っていると, 同級生の Aさんに話していた. いざ大学に入学してみると, 以前には知らなかった遊びがあり, 勉強などせずに遊び回っていた. そんな様子を見て, Aさんは“最近, 勉強はかどっているみたいだね”と言った.